
吸血姫がやって来る

MiT*i*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血姫がやって来る

【Nコード】

N5878X

【作者名】

M i T i

【あらすじ】

機械・ネットワーク・AI技術が進歩し、

それらの技術を結集して、とあるVRMMORPGが開発された。

そのゲームのプレイヤーの一人であるPC名”ソラ”。

彼が、とある個人イベントクエストを終えた事から、

この物語は始まる…

ファナスティア（前書き）

初めまして、創作小説初挑戦初投稿のM i T iです。

ネット小説、二次小説乱読が趣味の自分が、

”探せば見つかる、けどなかなかない”ジャンルの小説を、

「無いのなら、自分で作ってしまえ！」というコンセプトの元、執筆するに至った作品です。

完全趣味な為、未熟、文才がない、更新不定ではありますが、読んで頂き、楽しんで頂けたら幸いです。

では、どうぞ…

ファナスティア

”ファナスティア”

この世界には大別すると3の種族が存在する。

1つ。人間。

平民に貴族、頂点に王が君臨する身分階級。

一部には魔法という特殊な力を行使することが出来る魔法使いがいるが、

魔法が使えたらそいつは貴族、ということはない。

全国民の大多数によってえられた王が、

そのものの働きを認めて初めて貴族となれるのだ。

様々な職、身分階級があり、それらが集まりいくつかの派閥があるが、

人間族全体で見ると、大きく二つの派閥に分けられる。

その派閥とは…

1つ。動物。

犬や猫等のペット、豚や牛などの家畜といった普通の動物のほかに、ペガサスやドラゴンなどと言った幻獣も存在する。

人間から見て、動物を派閥で分けるとするならば、野生動物が飼われている動物か、になるが、

これら二つの派閥の間には特別な争いは無く、動物の世界にある唯一の法則は、弱肉強食。

強者が頂点に君臨する法則だが、これはどの世界でも共通するので、この法則が世界全体に影響することは無い。

あるとするならば、飼われている動物についてだが…

最後に、亜人。人ならざる人。

エルフやドワーフ、ワーウルフやマーメイド。その他多種多様な種族が存在する。

種族間の争いなど多少あるが、亜人の世界は基本各々が種族繁栄を目指しているため、

特に世界に影響することは無い。が、ここに人間が関わると別である…

多種多様な亜人は、それぞれの種族に何かしら特化したものがあり、その技能や力は人間を凌駕する。

強い力は恐れを生む。それは、感情が最も豊かであり複雑な人間ならば更に生みやすい。

いつしか、その力が自分達に向けられることを恐れ、向けられる前に廃絶してしまおうと考えるものが現れた。

同時に、人間こそが最高の種族であると考え、亜人の持つ力を自分達の為に使わせようと、従わせよと考えるものも現れる。

彼等に共通することは、亜人の支配だ。

だが、人間の中には、一方的に支配することを良しとせず、共に協力し合い、共に生きればお互いに更なる発展繁栄が望めるであろうと、亜人との共存を考えるものが現れる。

支配と共存。これが人間の世界を二つに分ける派閥だ。

このファナスティアでは、長きに渡り支配派の人間対亜人と共存派の人間で戦争が続いている。

情勢は一進一退。生き延びる為に、共存派の人間と亜人が、互いに知恵と技術を出し合い力を付ければ、

支配派は己等の知恵を寄せ集め、引き出し、時には敵を真似ること

で、自分達も力を付ける。

支配派が亜人を滅せようとするれば、亜人は滅ばされない為に、共存派は亜人を守るために、

同属ではある支配派の人間の前に立ち塞がり、亜人を守る。

種族の特性などから時折人を襲うときはあるが、亜人側からは人間を支配、

または殲滅しようとする意思は無い為、支配派の人間が諦めれば終わるのだが、

人間の欲望や感情は止まる事がない。

故に、支配という考えが消えず、戦いが終わることが無かった………

ファナステイア（後書き）

いかがでしたでしょうか？

とりあえずプロローグその1です。

キーワードを見て疑問に思う方がいると思われませんが（いて欲しいです）、

後何話かのプロローグと本編1～3話読んで頂けたら、

この疑問も解決、納得して頂けると… 思います。

それではこの辺で。

意見・感想お待ちしております。

吸血姫（前書き）

連続投稿です！と言っても、書けていたのがここまでなだけですが…

とにかくどうぞ！

吸血姫

ファナスティアのとある国にあるひとつの城。ここでも戦争の一端が開かれていた。

城の主は真祖の吸血鬼。過去に支配派が強力な人間兵器を創り出そうとして生まれた存在。

月の魔力により強力な力や魔法を行使することが出来るが、何処で失敗したのか、

時折抗い難い吸血衝動が沸き起こり、吸血の際に際立つ牙によって噛まれれば、

処女童貞であれば吸血種に、そうでない者はグールとなる、

これら吸血種に共通することは、月の魔力と吸った血に巡る力や魔力を取り込むことで力を増すことと、

吸血種になったことで強化された身体感覚器官。

強化された故に影響も大きくなった強い匂いを発するものや日光という弱点。

吸血種は、早さは異なるが、心臓と脳さえ無事ならばいかなる傷からも再生するが、

真祖以外は、日光を浴びるとその箇所が燃えて塵と成り、以後再生することが無い。

そして、吸血種になった大元の真祖を滅すると、直接間接に関わらず、

その真祖によって吸血種となったものは全て消滅する。

初め真祖の吸血鬼は男女10人、計20人存在した。

しかし、吸血種の強い力、吸血衝動と吸血種化を恐れ、自分達で創

つておきながら、
吸血種達を亜人とみなし、討伐対象として、長い年月、幾多の戦の
果てに、
生き残った真祖の吸血鬼は極少数となった。

生き残りの、城の主である吸血鬼の女性は、他の真祖とは違う所が
あった。

他の吸血鬼が生き延びる為に人を噛み吸血し、自らの力を増し配下
を増やす中、
彼女は、自分達真祖が負われる理由がその点にあるために決して人
を噛むことがなかった。

吸血衝動はわざわざ人を噛んで行わずとも、普通に血を飲めば治ま
ることだったので、
それを聞いてからは、共存派が血を提供することとなった。

対価を求めていることではなかったが、これに対して吸血鬼は、
その力を持って自分を護り生かしてくれる人々を守ることを誓った。

共存派の人間と城に住む吸血鬼が、互いに護りあい共に生きる日々
が続く、

何時しかその吸血鬼は、その美貌から、多くの者の血から得られた
強さから、

何があるうとも、共に生きる者を護り人を噛まないという誓いを貫
き通したその姿勢から、

いつしか彼女は”吸血姫”と呼ばれるようになった。

その日まで、吸血姫の所に彼女の同属、真祖の男がやってくるまで、稀に支配派の人間が襲ってくるも、それを撃退し、吸血姫と、彼女と共に暮らす人々は平穏な日々を送っていた。

彼は、吸血姫とは正反対とも言えた。

殺されぬために一つの場所に留まらず、生き延びる為と力を増すために、

行く先、逃げる先々で、吸血衝動を抑えることなく、

老若男女問わずに人を噛み血を吸って行った。

誰かの親が、子供が、友人が、恋人が吸血種にされた。

吸血されても服従させるなどの強制力は無い為に、それらの者が必ずしも自分達を襲うことは無く、

むしろその人の意思によつては吸血種になっただけなのだが、一度吸血種になってしまつては亜人、討伐対象とみなされる。

こうして多くの者達が命を落としていった。

復讐心は増して行き、人々はあらゆる手段を用いて吸血鬼を討伐しようとする。

逃げ切ることに限界を感じてきた吸血鬼は逃亡中に吸血姫の噂を耳にする。

「吸血鬼の真祖が、共存派の保護下で暮らしている」

それを聞いた吸血鬼は、同属である自分も保護されるだろう。

そう考えて吸血姫の住む城へと向かった。それまでと同じことをしながら…

吸血姫の城がある町へ来た吸血鬼は、何故彼女が保護されているかを調べもせず、

今までと変わらずに吸血衝動を抑えようともせず人を、共存派の間を噛み血を吸った。

突然現れ始めた吸血種。原因を調べれば直ぐに見つかり、その吸血鬼は危険とみなされ、町の人々は彼を追いたて、最後は吸血姫の手によって葬られた。が、既に遅かった…

隣人が亡くなってしまうえば、直接の原因であつた吸血鬼が消えようと、

その同属である吸血姫も恨まれ、復讐の対象とされる。

共存派に属していた者達の中に、吸血姫を滅せようとする者が現れ始め、

同じ共存派であつたが故に強く止められずにいた。

そしてとうとう我慢の限界が訪れ、復讐者たちが動き出し、同時に、吸血鬼を追ってきた支配派の軍隊までもがやってきた。

こうして、戦端が開かれた……………

吸血姫（後書き）

いかがでしたでしょうか？プロローグその2です。

プロローグは後1〜3話ほど続きます。

引き続きお読みになって頂けたら嬉しいです

ソラ（前書き）

3話目にしてやっと出てくるキャラクター。

でも、まだ本編じゃない…

だが、後もう少しだ。もう少しで…

とにかく、どうぞ！

ソラ

剣が、盾が、斧が振るわれ、矢が、槍が、魔法が飛び交う。武器を持った人が、人を乗せた動物が入り乱れてはぶつかり合い、一人また一人と倒れていく。

激戦の中を一人の青年が駆けていく。周囲の誰もが鎧などの防具と武器を纏う中、その青年が纏うのは脚甲と鉄拳付きのフィンガーグローブと黒で統一した衣服のみ。かなりの軽装であるが、動きはそれに見合った軽快さだ。

一箇所に留まることなく常に動き回り、罅迫り合いに一切発展させることなく、全ての敵に対して一撃離脱で命か意識を奪うか、遠くへ吹き飛ばすか、何らかの損傷を与える。

単独とは言え、早く、速く、広く打撃を与えてくる青年を無視できず、彼を注視することで生まれた隙を突いて、青年の仲間が突撃し殲滅する。

コレを繰り返していつて、青年とその仲間のチームは次々と敵を蹴散らしていった。

が、それでも敵の勢いは衰える様子が無い。

この戦闘は初めから青年が属する、吸血姫を守らんとする共存派が不利であった。

共存派の勢力が、青年を含めた吸血姫のために戦い、たとえ命を失っても構わないという意志と覚悟を抱く、城下町の一部の人間と、周囲に住む亜人の戦士なのに対して、敵の勢力は、これまで吸血鬼によって隣人が吸血種、或いはグールとされ失うことになり、その仇を討とうとする者たちと、それに乗じてやってきた多くの支配派の部隊だった。

仇を討とうとする者は、支配派だけでなく、どちらにも属さない者や、

城下町で暮らしていた者もいるのだ。

だが、たとえどれだけ大勢であろうと、たとえ見知った顔が敵として前に立とうと、

青年”ソラ”は一遍の迷いも無く戦場を駆け巡り、一人でも多くの仲間を生かそうと、一人でも多くの敵を滅ぼさんと蹴りを振るい鉄拳を放つ。

城の四方を敵に囲われ襲い来る中、ソラとその仲間達は城の正面、最も多くの敵が向かってくる城門の前で奮闘していた。

ソラ自身とその仲間達は揃って実力者ぞろいで、

個々人の実力もさることながら、その連携力もあって、

戦闘が始まってから長くないときが過ぎた今でも、

各々多少の傷を負いつつも誰一人欠けることなく生き残っていた。

その連携は一人の敵によって終わりを告げる。

一つの敵部隊を殲滅し次へ向かおうとした所、ソラ達の上から影が差した。

見上げてみると、一匹の飛竜が彼等の上空を通り過ぎて行った。

空中の敵に対しては地上からの狙撃、又は飛行能力を有する亜人によって守られているのだが、その飛竜は、飛竜に騎乗した人物はそれらを一蹴して城へと向かっていった。

「あいつは…まさか!？」

ソラは、あの飛竜に見覚えがあり、騎乗しているであろう人物に心当たりがあった。

このままでは吸血姫が危ういと思い、彼女の下へ行こうとするが、敵が大勢迫っている現状でこの場を離れるわけには行かないと思いつまる。

が、そんな彼の様子を察して仲間が促す。

「行け、ソラ!」

「な、何を言ってるんだ!？今この場を離れるわけには…」

「俺達だけで何とかするさ。それよりも、今城に向かっていった奴、やばいんだろ?」

「あ、ああ…」

「だったら尚更だ。さっさと行って姫さんを守って来い!」

「…スマン、ここは任せた!」

「おう!」

仲間の了承の声を聞き、ソラは城壁へと向かう。

城門を空けるわけにはいかないので、長時間の戦闘によってできたくぼみや、

刺さっている矢や槍を利用して、身体能力を遺憾なく発揮して、縄も梯子も使わずに壁を登りきる。

その勢いのまま、自分に出せる最大限の脚力と跳躍力をもって、速度を落とすことなく、屋根伝いに城へと、吸血姫の下へと向かう。

決して彼女を死なせない為に、守るために…

ソラ（後書き）

いかがでしたでしょうか？プロローグその3です。

次の話でキーワードにありました三角関係の片割れにして、本作ヒロインが登場します。

ある意味もう片方も出てきますが…

なぜ”ある意味”なのかは本編にて…

「たらたらプロローグ書いてないでさっさと本編は入れ」と言われるかもですが、もう少しお待ちを。

後一話、ないしは二話でプロローグは終わります。

それでは、この辺で。

意見、指摘、感想待ってます。

女戦士ミスト（前書き）

プロローグの4話目。

予定通り、本作ヒロインと”ある意味”三角関係の片割れが出てきます。

苦手な戦闘描写をがんばって書きました。

読んで、楽しんでいただけたら幸いです。
では、どうぞ…

女戦士ミスト

白で一番の広さがある広間、そこに備えられた、使われる素材が違えば門ともいえる巨大な窓。

透明な壁一枚を隔てて繰り広げられる激戦を一人の女性、吸血姫が見守っている。

両腰に剣を下げいつでも戦闘に参加できる、と言うより今すぐにも戦場に立ちたいところであつたが、

それは今尚自分のために戦う共存派たちに止められていた。

真祖の力を考えれば、戦場に出たら一騎当千の力を見せるだろうが、それはすなわち四方を敵に囲まれるということだ。

元城下町の者ならばともかく、支配派の者ならば亜人を、吸血姫を倒すためならばと、平気で大規模な攻撃をしてくる。

そこに吸血姫がいれば部下を囷に足止めして、

味方がいようと大量の矢を放ち、広域魔法を放ってくる。

巻き込まれるのが支配派だけなら良いが、共存派としては、支配派以外の者を完全に敵として割り切ることができず、極力無力化の方針で動いていた。

巻き込まれる者を減らすことと、支配派の技術力も警戒して、吸血姫には出ないでもらっていた。

多大な力を有する真祖の吸血姫であるが不死身ではないし、そもそも真祖を作り出したのは支配派だ。

何らかの対処技術を編み出している可能性もなくはない。故に吸血姫は戦場に出ずに城の防御に回ってもらっていた。

城には魔法使いと吸血姫が共同で張った魔法障壁が展開しており、城と中に非難している民を守っていた。

障壁は吸血姫が在城する限り展開され、敵を認識して侵入を阻み、大砲の砲弾だろうと大規模魔法だろうと防ぐことができる堅いものだ。

だが、いかに強力だろうと、それ以上の強さの攻撃を受ければ弱まるし、

何かしらの技術によって侵入を許してしまうかもしれない。

その時に対処するために、いつでも戦闘ができるように準備を怠っていないかった。

その備えは、無駄になることはなかった…

吸血姫の視界内、戦場の遠方上空に一つの影が映る。

影は一直線に吸血姫がいるところに向かっており、

その巨体を、その正体を顕にする。それは一匹の飛竜だった。

飛竜程の巨体が全速力でぶつかってこようと障壁は揺るがないだろうが、

何かの予感を感じて飛竜を注視すると、何者かが騎乗しているのが見える。

一人と一匹が近づき、騎乗者が持つ物が見えてくる。

それは、その人と同じくらいの大きさの十字架。

それが確認できる距離まで近づくと、騎乗者が十字架の上部をこちらに向けて何かを放った。

放たれたのは通常の倍の太さ、長さは普通の矢。それが4連続で放たれ障壁に刺さった。

4本の矢は隣の矢と線を繋ぎ合い、1つの四角形を描いて、障壁に

穴が開いた。

その穴から障壁を通過した飛竜は、勢いそのまま窓を割り破り広間へ突入してきた。

降り注ぐガラスの破片と、自分を噛み砕こうとする飛竜の顎を後ろに大きく跳躍することでかわそうとする。

そこに追撃として、刃が着けられ巨剣となった十字架を振り下ろしてくる騎乗者。

即座に両腰の剣を抜いて交差しそれを防ぐ。

金属がぶつかり合う甲高い音を響かせながら飛ばされ、大きく距離を置いて着地する。

「派手にやってくれたな。それに、今の一撃。

隠しようのない怒りを憎しみを感じたが…

同じ真祖であつたというだけでそこまで私が憎いか？ミスト」

自分の名前が呼ばれ、十字架を振り下ろし残身していた騎乗者、ミストという女戦士は十字架を構え直し吸血姫を睨み付ける。

「ああ、憎いぞ吸血姫」

「…もう名前で呼んでくれぬか」

この2人は知り合いであり、一時期ここにソラを加えた3人で旅もした仲でもあつた。

それが今では敵と見なされ剣を向けられる。残念に思いながら、吸血姫は問いかける。

「何故剣を向ける？何故そこまで私を憎む？

共存派ではないが支配派に属してもいなかったし、

身内家族が被害に遭ったわけでもなかっただろっ」

「支配派も家族も関係ない。私が憎む理由は一つ。
おまえが私から…ソラを奪ったからだ！」

叫びながら十字架を振りかぶってくる。

それを両手の剣でいなしながら理由を考える。

いや、改めて考えるまでもなかった。

ソラの名前が出てきた時点で大体を理解できてしまった。

「何度も…何度も説得した！」

共存派でいる限り、吸血姫のそばにいる限り、支配派が襲ってくる！

死ぬかもしれないと！殺されるかもしれないと！

だが…ソラは聞いてくれなかった！

ソラは、ソラは…おまえを選んで私から離れていった…！」

止まることなく振るわれ続ける剣戟を反撃することなく、

時に防ぎ、時に受け流し、時にかわしながら、

吸血姫はミストの叫びを受けていた。

剣戟が次第に感情が乗って苛烈に、しかし洗練されていき、

十字剣に比べると頼りないくらいに細い剣二振でいなすのが困難になり、魔法も混ぜてくる。

相手がミスト、かつての旅仲間であるということと殺傷性のあるものは極力使わず、

風圧や衝撃などによって遠くに押しやる。

疲労による無力化を狙ったが、吸血姫を討ち取ることしか考えていないミストはその勢いを衰えず、

押しやられる度に感情を、怒りと憎しみを倍増させることとなった。

それでも諦めず、吸血姫は無力化を図りながら説得を続ける。

「本当に止まるつもりはないのか、ミスト」

「あるわけがない！」

「自惚れるわけではないが、私が死ねば、ソラは悲しむ。

殺した者を恨み、憎むだろう。仇討ちなどはせんだろつが、それはつまり、生きて傍にいる限りそれらが向けられることになる。

それでも良いのか！？」

「それでも！ソラが生きてくれるのならそれでいい！！」

「だが、ソラは根っから共存派の人間。私や他の亜人のために戦うことはやめないぞ」

「そんな思想…おまえを殺すことで変えてみせる！！」

叫ぶと同時に十字架を腰に抱え間髪入れず矢を連続で放つ。

天井と床、それぞれ4力所にささり、先ほどと同様に線が繋がり、更に線同士が繋がって面となり、半透明な立方体の膜が完成し、広間を囲った。

「これは…」

「封魔結界。これでこの広間にいる限り、おまえは魔法を使えなくなっただけ」

「こんなもの結界の起点さえ壊せばよいのだろつ」

「私達を相手にしながらそれが出来るか？」

「魔法が使えずとも、真祖の身体能力を持ってすれば…達？」

「私がどうやってここに来たのか忘れたか？やれ！ギャラドス！」

指示を受けてミストが騎乗していた飛竜、ギャラドスが文字通り火を噴いた。

盾もなく魔法による障壁を張れない吸血姫は大きく跳ぶことで回避するが、

跳躍によって地に足がつかない状態になった隙を逃すはずがなく、ミストもギャラドスが噴く火に乗るような動きで吸血姫に迫る。

封魔結界が張られたことで吸血姫は圧倒的不利に陥った。

魔法が使えないという条件は吸血姫もミストも同じだが、

魔法を交えることで無敵とも言えた吸血姫と、

元から魔法が使えないために魔法に頼らずに戦っていたミスト。

魔法がなかったら武器を使った接近戦の実力は同等だった。

二人だけならば拮抗したかもしれないが、この場には飛竜がいた。

咆吼をあげれば火が噴き、翼を羽ばたかせれば旋風と鎌鼬が吹き荒れ、

腕や足、尾が振るわれ打ち付けると地が揺れ岩石が盛り上がる。

これら、人間が魔法を使ってやっと起こせる現象を、

竜族である飛竜は自身の身一つで起こすことができるのだ。

結界を破ろうにもミストと飛竜がそれを許さず、ミストを先に無力化しようとしても飛竜が阻み、飛竜を先にどうかしようにも剣二振りでは力不足。

状況は悪化の一途をたどり、吸血姫の傷は徐々に増えていき、さらに悪いことに、十字剣と飛竜の豪腕・豪脚・豪尾を受け防いで、限界が来たのか剣の片方が折れてしまった。

もう片方も限界が近いことを感じて、剣を使うのは攻撃時のみとし、敵の攻撃は回避することに専念していたのだが、こうなっては、戦闘はもはやワンサイドゲーム。

矢と十字剣の遠近両方をこなせるミストと飛竜のコンビネーションに、

ついに吸血姫は追い詰められてしまった。

矢で服を床に縫い付けられたところを飛竜の豪腕がとらえた。

咄嗟に剣を盾にするが、限界寸前だった剣は容易く折り砕かれ、それに止まらず壁に打ち付けられ、追撃の矢が身体に刺さり壁に縫い付けられた。

「ぐううつ!？」

苦渋の声を漏らす吸血姫にミストが近づく。

懷から一本の矢を取り出し十字架に装填する。

「太陽の欠片」を加工して作られた鏃だ。

この矢で心臓を貫かれ焼かれてしまえば、

例え吸血鬼の真祖だろうと生きてはいられないだろう。

これで終わりだ…死に果てる吸血姫!!」

体力も低下し、魔法も使えず、身動きもとれない吸血姫に、

無慈悲にも刺さった対象を燃え上がらせる矢が放たれる。

「すまないソラ…どうやらここまでのようだ」

もはや避けられぬ死を覚悟して瞳を閉じようとする。

レティーーーー！！

だが、自分の名前を愛称で叫ぶ声に閉じようとした瞳を大きく開く。

目の前に黒い背中が現れ視界を埋めた。

女戦士ミスト（後書き）

いかがでしたでしょうか？プロローグその4です。

次の話でプロローグは終わり（の予定）です。
ヒロイン吸血姫の本名も次に出てきます。

それでは、この辺で。

意見・指摘・感想まっくす

逆召喚（前書き）

プロローグの5話目です。

これがプロローグの最後になります。

では、どうぞ…

逆召喚

飛来する矢の前に飛び込み、矢羽を掴んで止めて着地しながら振り向く。

愛称を呼び、命を救ってくれた男、ソラの顔を見て、壁に縫い付けられていた痛みと迫る死に歪んでいた表情が一瞬にして晴れた。

「大丈夫か、レティ!?」

「見ての通り、あまり芳しくない状況だ」

「…動けるか？」

「何とか、な!」

叫びながら、縫い付けていた矢ごと壁から離れて着地。
足に力を込めて立ち上がるうとするが、力が入らず片膝をつく形になった。

「どうした、レティ!?」

「ぬう…力が入らぬ、どうやら矢に何か仕込まれていたようだ」

「大丈夫なのか？」

「真祖の私に効くほどだから、かなり強力な物だが死にはせん。
魔法が封じられているから回復・解毒が出来んが、
時間をかければ問題ない」

「そうか。…血、飲むか？」

「ありがたいが、ミストが許してくれぬだろう」

ミストを見ると、自分たち二人に、特にソラに、隠しようのない怒りの表情を向けている。

「来てしまったんだな。ソラ」

「当然。レティは死なせない。俺の血を飲ませてでも助けてみせるさ」

「何故吸血姫にそこまでする！？自分から吸血鬼になって支配派に狙われたいのか！」

「いやいや、飲ませるだけで噛まれないから。吸血鬼にはならねえよ」

「そうだとしても！血を差し出すこと自体が狙われる理由になる！それでもか！？」

「今更だろ。誰がなんと言おうと、俺はレティを守るからな」

「…私でも、変わらないか」

「…悪いな」

「あれほど、言ったのに…想いを伝えたのに…私の言葉は聞いてくれないのか」

「ミストの気持ちは嬉しいが…俺にはその想いに応えられない」

「何故そこまで…」

「ん…俺が共存派だからだとか、支配派が気に入らないとか、同情したとか、約束したとか取って付けた理由はいろいろあるが、一番の理由は…俺がそうしたいからだ。
生きている限り、死ぬその瞬間まで、俺はレティと共にいたい。
それだけだ」

ソラの言葉を聞いて、もう何を言っても無駄だと悟ったミストは、悲壮にくれていたがそれも数秒。
迷いや葛藤を払うように十字剣を大きく振って構え、ソラを睨み付ける。

「言葉では伝わらないようだな。ならば、力尽くで聞かせるまでだ
！」

「力尽く、か…なら、こっちもぶん殴つても止めるからな」

「私たちが相手に、それができるかな？」

「ミストだけならまだいけるさ」

「…何だと」

「さつきから、相棒が静かなのが不思議に思わないか？」

その台詞にギャラドスに視線を向け、驚愕する。

ギャラドスは首の付け根辺りを押さえ、痛みと苦しみに呻き打ち震えていた。

「ギャラドス!？」

「レティに気を取られている隙にな。竜の急所”竜核”にダメージを与えた。

完全に壊せりや良かったんだが、傷つけるだけで手甲がおじゃんになっちまった。

それに、時間をかけてたらレティがやられてたからな。

まゝとにかく、これでギャラドスは封じた。こっちもレティが回復中だから、

後は俺かミストのどっちが倒れるか、

それかレティがギャラドスのどっちが先に回復するかだな」

「…武器もないのに、私を倒せると？」

「元々、俺は武器だの魔法だのあんまり使ってなかったからなこと相手が人間なら体術だけでなんとかなるさ」

「ならば、私の十字剣とソラの拳、そちらが強いかな勝負だ!」

飛び掛り振り下ろしてきた十字剣を紙一重で避け、

カウンターで放った拳を十字架を盾にして防ぐ。

時折レティに向けて矢が放たれ、何かが仕込まれている可能性があるるので、

鏃に触れないように注意して矢を止めて、その隙を突いてミストが切りかかり、

それを危うげながらも何とかいなす。

それらの行動を繰り返すこと数分、ついに終わりが訪れる。
ソラがミストを抑えている間に結界の起点となる矢の一本を破壊することができた。

なんらかの術式が施されていたために破壊するのに時間がかかってしまったが、

その甲斐あつて魔法が使えるようになったレティは、
身体を巡っていた毒と矢が刺さつて出来た風穴を一瞬に直し、
ソラの援護に廻ろうとした。

だが、レティと同時に、ギャラドスまでもが動き出した。
完全に回復していないので咆哮こそ上げられなかったが、
それでも身体を動かすまでには回復していた。

急所にダメージを受けてからの予想外の回復速度に、
まだ動けないを思い警戒をしていなかったせいで、
豪腕の一振をソラはまともに受けて吹き飛ばされ、
慌てて受け止めようとしたレティを巻き込んで壁に強く打ち付けられた。

「止めだ！吸血姫――！！」

突進する勢いで十字剣を突き刺そうとするミスト。

打ち付けられた痛みから身体が硬直してまともに動くことが出来ず、
先ほどまであった二振りの剣もないため防ぐ手段もない。

迫りくる十字架に、とうとう終わってしまうのかと、
これでやっと終わるのだと、レティとミストは思った。
だがそれは、再び黒い背中に遮られることとなった。

ドシュッ

骨と肉を抉り碎き貫く剣。それを使って流れ出る大量の血。

目の前の光景を理解できず呆然としてしまったが、
血を流す男を見て声を荒げる。

「ソラ!?」

「ツゲホ、ツガホ…あゝ無事か?レティ」

血を吐き、口から垂れ流しながらソラが問いかけてくる。

「わ、わたしよりもソラが…」

「あゝうん、ちょっとヤバイな…それよりもっと、ミスト」

「あ、あああ、わ、わた、わたしは…」

無力化こそ狙っていたが殺すことなど考えていなかったミストは、
自らの手で自分が思いを寄せていたソラを死に近づけている光景に
動揺していた。

意識がはつきりしていないことをいいことに、剣を身体に貫かせた
まま近づき、

鳩尾に拳を打ち込んで意識を奪った。

相棒のミストが倒されたことに怒ったギャラドスが近づこうとする
が、

飛び掛る体勢であったために露になっていた竜核にむけて、
刺さっていた十字剣を引き抜いて、全力で投げて刺し、

竜核が完全に破壊されたことで、ギャラドスは完全に息絶えた。

剣を抜いたことで、剣を伝って流れ出ていた血が穴いっぱいから溢
れ出る。

慌てて近寄り持てる全ての魔力をつぎ込んで回復魔法をかけるが、出来た風穴は大きく、流した血が多すぎてもはやソラの死は目前だった。

それでも傷を塞ごうとするレティにソラは微笑を見せる。

「ありがとう…すまないなレティ。もうダメっぽい」

「馬鹿なことを言うな！私は、私は諦めない！！」

「いや…もうダメだったのは自分が一番わかってるよ。

と、言うより、今喋れてる方がありえねえこつただからな。それよりも…」

言いながら、流れ出た血を利用して床に何かを描き始めた。

「これは…逆召喚陣？」

「さっきの封魔結界で城に張っていた障壁へのパスが切れて敵が侵入したはずだ。

もうじきここにも敵が来る。その前に、レティを安全なところに送る」

「ど、どこに送ると言うのだ？」

「わからん…とりあえず、未来のどっかだな」

「み、未来だと？」

「俺はもうダメだからな…だから、こいつを使う」

言いながら懷から拳大の緑に輝く石を取り出す。

「それは…転生石か!？」

「一緒にいるって約束だがな…今の俺はもう限界だ。
だから…未来で一緒になろう」

ソラの言いたいことは理解できたが納得は出来ていなかった。
死ぬ寸前ではあるが、もしかしたら生きながらえるかもしれない。
このような大掛かりな逆召喚魔法。必ず望む形で発動する保証もない。

何より、今この瞬間目の前にいるソラが死んでしまうことを受け入れることが出来なかった。

悩み苦しみ葛藤するレティだが、それを邪魔するように広間の扉に轟音があった。

連続してなる音に、敵が扉の向こう側まで来ていることを告げていた。

「もう来ちまったか…それじゃ、やるぞ」

「ま、待て!私は」

「…約束する。何処の誰に、何に転生するかは分かんが…」

俺は必ず召喚陣を発動してレティを呼ぶ。

そうしたら…今度こそずっと一緒にいよう。

そんじゃ…」

言っているうちに描き終えた逆召喚陣を発動させる。

何を言っても止まらなさと悟ったレティは、諦めておとなしくする

ことにした。

広大なる野を 高くそびえし山を

深くに沈む谷を 母なる海を

限りなき空を 悠久なる時を超え

この者レティレスフィアを呼ぶ者の元へと送りたまえ

汝を呼ぶはわが魂を受け継ぎし者

ここに我はレティレスフィアを送り給う

詠唱を終えると陣が発動し、レティの身体を光が包み込む。
足元から光の粒子となって消えていく。

最後の瞬間、二人は穏やかな微笑みを交し合う。

「約束だ、未来で会おう」

「ああ、未来で…」

その言葉を最後に、ついにレティが消え去り、それを見届けてソラは倒れた。

広間の扉は今も侵入しようとする敵が、扉を打ち付けている。

片手に転生石を持ち、もう片方の手で懷から別の石を取り出す。

取り出したのは、これまた拳大の燃えるように赤く輝く石。

火爆石と呼ばれるそれは、込めた魔力の分だけ高威力で爆発する石。

やがて、扉が破壊され、なだれ込んでくる敵兵を見据えて、

不敵な笑みを浮かべながら両手の石を発動させる。

「さあて…レティに会いに行こうかな！」

破壊の光が敵兵を、未来への光がソラを包み込み空へと、未来へと消えていった…

【転生石が発動されました

現パラメータステータスを受け継いでキャラクターを更新できます

デー

タを保存しますか？ Yes/No】

逆召喚（後書き）

やっとこさプロローグが終わりました。

次回からは本編に入りまして、

内容が打って変わった話が続きます。

ついでに、ファナスティアの世界も、

会話の中では出ますが、それ以外はあまりでない予定です。

それでは、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5878x/>

吸血姫がやって来る

2011年12月2日15時50分発行